

れた。意を決して齒舞漁協に復職。花咲魚市場加工部（缶詰工場）（冷凍工場）担当後、事業部昆布の小袋詰め製造を一番初めに担当し、現在の大事業の基礎を作った。

定年六十歳制度ができてから六十七歳まで臨時職員と好待遇にて勤務させていただいた。

更にもう二年と言われたが、余りにも虫が好い事であり、辞退させていただいた。

在職中、昭和五十三年小樽市にて、占守島にて終戦となった速射砲連一中隊の戦友会が催された。その折に私の分隊もソ連抑留者も一緒というので招待があり、出席した。その折に幹事長が小泉忠弘様でした。

参加者に抑留補償について説明があり、後日「全抑協道連」となりました。創立が小樽で、この会が始まりで小樽が一番、二番は根室で、三番は函館です。瀬川会長を支えた矢島様とは共に連絡を取り、会員の増加で函館は一番多い、約八百人です。根室支部は郡部四町も加入させますと言ったら、「今村の大砲野郎」と言われましたが、二百三十人ほどに会員も増えまし

た。

全抑協北海道連合会の創立には、根室支部の田村副支部長と共に今村も事務局長として参加、慰霊碑建立委員として呼び掛けあり、微力ながら寄付集めに協力しました。

立派な碑が完成、生きて還った者としての務めでしょう。

## 戦闘とシベリア抑留

岩手県 佐々木 清 三

昭和二十（一九四五）年七月、ソ満国境の緊迫した情報が乱れ飛ぶ中、真夏の太陽の光を受け暑い盛りに、五叉溝の三角兵舎よりい地区三里岳に、移動天幕生活をしながら対ソ戦に備えての陣地構築作業であった。草原は花咲き乱れ、我々を慰めてくれて毎日楽しい生活であった。

八月九日、青空の澄みきった良い天気朝、点呼を

終わり体操をしているとき、西方阿爾山方向上空より爆音高く飛行機の大編隊が飛来した。最初は日本の飛行機かと思つたが、よく見ると赤星のマークであり、いよいよソ連参戦と思ひ体に緊張感を覚えた。飛行機は戦爆連合の大編隊で約二十機くらいで新京（長春）方面に飛び去つた。部隊は直ちに戦闘体制を整へ陣地配備についた。

一夜明け十日、ソ軍飛行機大編隊の波状的空襲で、五叉溝の師団司令部弾薬庫等が爆撃されて大爆音が間断なく聞こえてきた。我々の上空にも飛来し機銃掃射を受けること頻繁。我々も散開して軽機や小銃をもつてこれに応戦した。

十二日、師団命令により新京まで転進。新京まで何日かかるか……、敗戦の予感がした。転進のために地区陣地より夜間出発す。行軍途中住みなれた五叉溝の三角兵舎方向を見ると、連隊本部ほか主なる本営の建物は、夜空に火柱を立て燃えている状況を眺め、不安と悲しい気持ち一心であった。ソ連の侵攻により阿爾山五叉溝在住の満人は、中央部へ避難するため馬車に

老人婦女子と家財道具を満載した列、延々と続き果てしなかつた。

十三日、西口付近に到着。先遣部隊となり行進中、東方山頂より敵味方重機の銃声をして敵の曳光弾が頭上高く飛んできて夜空に白線を描いた。また、前の大隊の夜襲があちこちで始まり、照明弾が上がり、時々真昼のように山々を明るくし、にわかには戦場はやかましくなつてきた。

十四日の朝、だんだん東の空が明るくなつてきた。朝もやの中、敵と交戦中、常盤見習士官と阿部藤栄上等兵が戦死した。二人の戦死者を戦場に放置してきたことは誠に申し訳ないと思つたが、当時は戦況不利でいたしかたなく、御冥福を祈り御許しを得たい。

この戦いにおいて初めてソ連兵の戦死者を発見した。まだ若い十七、八歳くらいの丸坊主の兵隊であつた。一戦一戦進軍し、ある高地を占領した時に敵は砲二門を遺棄敗走した。

やれやれと思ひ交替で朝食に取りかかろうとしたとき、不意に敵の逆襲に遭い、朝食半ばにして応戦中、

三戸曹長が肩に銃弾を受け負傷した。

我々の戦況不利ながらも山また山を進軍し、小高い山を占拠するや、思いがけない敵の迫撃砲の集中砲火を浴び、草木も吹っ飛び茶色の山肌を表し戦死負傷者が続出した。頭から何十発と集中落下する音は雷のよう、私は頭を草の根につけて天命を待った。

この時、頼みの猪股大隊長が大腿部を負傷したので、木村准尉と二人で後方凹地に収容、衛生兵に手当てをさせた。相当重傷なので、木村准尉は、私はか三人で後方基地に移送することとした。急造担架に乗せ運ぶ途中、敵飛行機の機銃掃射を受けること頻繁であった。何キロ担ぎ歩いたかわからない。ただ夢中で歩いていると、救援の大隊行李たいぐんと会い、介護輸送を頼み西口の広い盆地に着いた。間もなく前線より後退してきた本部と合流した。

その夜は、敵の攻撃に対し警戒態勢を取りながら、大隊行李の携行した缶詰や羊羹ようかん、酒等で久しぶりに胃袋を喜ばせ疲労も吹っ飛んだ。緊張もやっとほぐれ武装したまま草を枕に一夜を明かした。

明けて十五日、我々の進路は既に敵の機甲師団により遮断されている状況であり、大隊本部も態勢を立て直しハマコーザ方向に脱出することになる。大隊長鈴木中尉、副官今淵准尉、負傷した猪股大隊長と三戸曹長は大隊とは別に大隊行李と行動を共にした。

この日は朝から曇りで雨の降りそうな重苦しい日であった。脱出の機を見ているうちに敵の砲撃が始まり、珍しい砲弾が上空で大爆音をたて破裂し榴散弾が雨あられのように降ってきた。これがソ連の新式兵器のカチューシャであったことを後で知らされた。

一刻も早く西口を脱出しないと部隊は全滅の羽目になると思っていたやさき、神の救いか雷が鳴り大豪雨となった。その機を見てハマコーザ脱出行進が始まった。道路なく山の沢伝いに濁流の暗やみの中を我先に逃げる。その心境たるやまことに怖く淋しいものであった。途中、我が軍のトラックその他の車両多数破壊された残骸が見られた。

ある地点で休憩したら、麻袋の破れから米が泥の中に散乱してあった。これを皆で拾い集め持ち歩き一晚

中ずぶぬれの行軍であった。朝になり雨も晴れて小さい雑木林の中に入り大休止となる、ここはハマコーザであった。ここには満人の家一軒あり、畑のジャガイモを盗み、朝食の腹ごしらえをして元氣を取り戻した。

太陽の暑い日差しを受けながら、昨夜のぬれた被服を乾かしているとまたソ連戦車の追撃を受ける。迫撃砲の砲弾に見舞われ山の樹木は倒され、ついにいたたまれず脱出した。

一行軍中、時折ソ連飛行機上空を飛来するも、爆撃、機銃掃射もないのでちょっと不思議に思った。そのうちに十五日、日本は無条件降伏したとの情報が部隊内に流れ始めたが、我々兵隊にはわからない。ただひたすら新京目指して転進のための行軍だと思っていた。

連日の行軍も食料もなく、途中満人白系ロシア人の畑をあさり、トウモロコシ、ジャガイモ、野草のアマドコロの根など、時には我々と共に戦い負傷腰傷を起こした軍馬を銃殺して命をつないだこともある。ある時は川に手榴弾を投げ川マスを捕り、焼いて食べ、空

腹を慰めたことが幾度かあった。馬肉、魚の味つけは岩塩であり、一番困ったのは煮焼きのための薪であり、草原ばかりで木はない。唯一の頼みの綱の萩の根を掘り、背負いながら行軍し、休憩時これを集めて何とか炊事ができた。

来る日も来る日も昼夜の行軍のため、人馬も疲れ果てていて、被服は汗と泥まみれで敗残兵そのものであった。

夜行軍中、将校は馬上の居眠りで落ちそうになり、何度か交替して乗ったこともある。約十日間の長い行軍であり、食糧難を克服し心身共に疲れ果てていた。

部隊は哈什台<sup>ハジヤクタイ</sup>においてまたソ連軍と遭遇、散開しながら進撃し始めたとき東方遠く山頂からの迫撃砲弾のため、砂田伍長、小松枝伍長が戦死した。

敵の砲火を浴びながら一山一山占拠進撃中、日没となり大隊本部は小さな高地の敵を夜襲することとなり、足音たてず静かにただ黙々と草を分けて進む気持ちは不気味な思いであった。山頂の敵は、我々の近接を察知したか、重機を乱射し始めたが頭上高く飛来し

てきた。なおも前進近接し突撃を敢行し山頂を占領したが、敵の銃撃と手榴弾が飛んできた。我々も手榴弾で応戦したが届かない。敵の手榴弾がどんどん落下爆発するので陣地を固守することができず、下がれの命令により暗夜の銃声激しい中を一目散に山下に逃げる。と一斉射撃を受ける。足音近くの草がバラバラと音がする中、飛び上がりながら走っておっかなびっくりであった。この怖さを表現はできない。複雑なる気持ちで、戦闘したものでもわからないと思う。

我々の連隊は、この哈什台の戦闘により敵に多大なる損害を与えたほか、軍旗を奪ったことなど後に知らされて一躍元気づいた。一戦終わり、敵の襲撃もななく、また行軍が始まり、やれやれとした気持ちになったものの、こんな状況いつまで続くかと考えれば不安でもあった。

行軍途中ある夜、大雨の中、天幕を張り寝ていて朝眼をさますと、腰まで雨水につかっていた。それだけ疲れ切っていたことが今でも記憶に残っている。

一夜明け雨もやみ行軍中、前方はるかに満人部落が

見えてきた。部落に着くや土造りの家に休憩することになり、ここで何と言っても腹ごしらえが一番と考えて、豚一頭をもらい久しぶりに肉汁とアワ飯にありついて人間らしい気分になり体力もついた。

この部落は音徳爾イントルであることが後でわかったが、不思議に満人の態度は横暴で蔣介石が親指だと我々に向かい怒鳴ったり笑ったりしている。中には数人で長い草刈り鎌を持ちながら我々に向かって何か怒っているようなそぶりを見せる人もいた。我々には満語は解らないので、あまり気にしないでいた。

突然はるか東方上空より飛来する飛行機を発見した。だんだん我々のいる音徳爾に近づいて低飛行して東方高地に着陸したように見えた。よく見ると日本軍の旧型複葉機であった。直ちに各隊長連隊本部に集合があった。しばらくして猪股大隊長が悲壮なる面持ちで帰ると大隊全員集合があり、日本は八月十五日、連合軍に対し、無条件降伏したとの訓示あり、その瞬間しばらく呆然として全く信じられなかった。本当か疑問を抱いたが本当ならばこれで日本軍も終わりだ。敗

戦を知らない天皇の軍隊神兵も頭の中から消えかけて魂の抜けた軍隊になった。

直ちに武装解除の命令が出て、ソ連軍の指定の場所、小高い丘に、兵器弾薬を集積してソ連軍に渡した。部落に帰ると、ソ連の兵隊が乗馬で自動短銃を肩にかけ巡察に来て我々に向かい、チャスイエスと話しかけてきた。ロシア語がわからないので黙っている、馬から降りて、ある兵隊の腕をまくり、時計を強奪した。反抗したなら大変、自動短銃を向けおどかされた。これを見て皆で時計を隠すこととした。また、将校の黒長靴も彼らにとっては相当目ぼしいものでありダワイされたものも多数あった。

武器のない軍隊くらい惨めなことはない。新たにソ連の指示に従い編成されソ連軍兵士の監視下行軍が始まった。どこに行くかわからない、果てしないただ黙々として足重の行軍であった。興安にて天幕生活をやり、徳伯斯で兵舎に恵まれ、貨車にて五福瑪に移動後、衣類等多数渡され、また貨車にて入ソした。かつては皇軍関東軍の精銳我が二〇一部隊もこれで終止符

を打った。

## 一、入ソ

昭和二十年十月下旬、五福瑪に集結、東京ダモイとだまされて、千五百人作業第十五大隊編成された。在満日本人商店からダワイした物資、特に衣類・反物等を背負わされ貨車で満州里を経て入ソした。東京ダモイも不安であったが、私たちはシベリア鉄道によりナホトカに行くなどと話して元気を出していた。

## 二、ハタブラク駅着

我々の貨車は、シベリアに入るや小さな寒村の駅、ハタブラク下車、東方約十キロの行進、シルロアー収容所に着く。正門前で持ち物検査があり、我々の生活に必要なものを除き全部取り上げられ、荷物運びをやらされた。これでダモイのことが頭から消えた。

収容所は四方鉄条網で囲まれて、櫓の監視哨があり正門には自動小銃を持った警戒兵で、嚴重なものであった。

### 三、将校転出

十一月に入るや収容所が狭く千五百人は生活できないので、将校を中心とした五百人が他に転出した。将校で残ったのは日本側所長藤川巖氏と水谷軍医二人だけであった。

### 四、死者続出

十二月になり、栄養失調に回帰熱蔓延、シラミの媒介により毎日死者が出た。昭和二十年十二月から昭和二十一年三月までの四カ月で、四百八十一人の多くの死者を出した。時には一夜に十数人の死者を出したこともあり、ある戦友は真夜中に四〇度の高熱にうなされ大声で「日本に帰る汽車が来た。皆起きろ」と叫び外に出てまた寝て、朝には冷たくなっていた。

### 五、環境給与改善

多くの死者続出でソ連側も驚き、食料と環境改善に取り組み、チタより元チチハル陸軍病院長、牧軍医中佐が来て、診察の結果回帰熱と判断し、サルバルサン注射で治す。五百人の戦友は注射してもらい、助けられた。我々生存者の命の恩人である。給与改善と環境

整備も進み、少し体調も良くなり作業できるようになった。

### 六、民主運動

昭和二十一年秋、チタで「シベリア天皇」の共産主義教育を受けたアクチーブ、柏崎晴夫が収容所に派遣されて来た。民主運動を強力に展開され私は、恐ろしい赤いキツネが来たと思っていたが、同じ日本人で生きるための手段と思った。働かざる者は食うべからず、日本新聞の宣伝など、資本主義・日本帝国主義・天皇制打倒、共産主義の洗脳が始まり、民衆の歌「赤旗」など歌わされ、作業より精神面でつらかった。

ソ同盟の五カ年計画達成のため、また民主化強化のため、私は戦友の選挙により八十人の寮長に選出された。また、作業隊長に任命され、反ファシスト委員会の委員に選ばれてアクチーブの指導に従った。反すると生きて帰れないと思い、内心は階級意識に目覚めていないので致し方ない。

毎日のようにアクチーブの仲間たちの目が自分に注がれて、本当に気を許せなかった。収容所にいるよ

り、鉱山の作業が一番気楽であった。また、作業隊員にもノルマ達成など一言も言わず、ただ危害予防と健康に注意し皆元気で帰国するよう話していた。

#### 七、我々の作業（鉱山）

鉱山は地下坑内作業で寒さをしのぎ大いに助かった。収容所の近くの山の中腹にあるタングステン鉱山で、縦坑があり地下二十メートルぐらいの地下坑道から、四、五本に分かれた横の坑道があり、坑道にザボイとダーチカ一組をトロッコに積み運搬するもの一組、トロッコを縦坑まで運びロシア人の昇降機係に渡し、地上では鉱石を指定の場所に捨てる。私の作業は隊員を各部署に配し、各部署を巡回して特に危害予防に注意した。

ロシアの監督、名前はガマ（通称）に私はタングステン鉱を探せと言われ、隊員に話し作業のかたわら鉱石探しに熱中した。作業ノルマより私たちの実益に叶った良い話で隊員一同喜んで探した。

タングステン鉱は黒い石で重い、割れば鉄と同じ、それを見つけて集め監督にやると喜んだ。翌日、黒バ

ン、砂糖、タバコ（マホルカ）等たくさんもらい、隊員全部で分けて、食べたり飲んだり楽しみであった。

監督の話では、このタングステン鉱をボルジアのマガジンにある物資の配給所に持って行くと、特別の配給があり、自分の欲しい物資と交換できるとのことと喜んでいた。

#### 八、つるしあげ

昭和二十三年五月上旬、私は、作業二番方で午後四時より十二時までの作業終了後、帰途前雨が降り、ぬれて帰り、被服その他の整理を要する隊員のことを考えて、毎日作業終了後読み聞かせることを決められていたソ連共産党史を読まずに早く休ませた。

翌日午後急に柏崎、滝本、阿部、三人のアクチーブに呼び出され、中央広場で、「なぜソ連共産党史を読まなかったか、ソ連の五カ年計画にブレーキをかけた。また君は資本主義の残滓<sup>ざんし</sup>がある。さらに、元第一大隊本部にいたとき長刀をつつて威張っていた」など、数々の悪口を言われ、一時間ばかりで終わったが、中には今までの私の作業隊員もいた。今日から



は、寮長、作業隊長をクビと言われ、営倉二日（昼食抜き）。営倉二日間は、私の元の隊員の差し入れで助けられた。

私のかわりの作業隊長は、ハラショウラポーターのK氏になり、監督が、佐々木はなぜ来ない、デモクラシーだめだと言う。後任のK氏は、監督からロシア語で隊員四十人の名簿を書くことを言われたが書けない。監督が怒り、鉱山事務所に連絡し、私を名簿書きによこすよう頼み、一週間ばかり行つて監督と最後の別れをした。

監督に呼ばれ、お前は父母あるかと聞かれ、父（パパ）なし、母（ママ）ある。マダムあるか、あると答えた。子供（マリンケ）あるか。なし。東京ダモイがあるから、病氣、けがに注意して元気で帰れ。人種が違つても人間の良心は皆同じだと強く感じて涙が出た。

次の作業は収容所の裏山のゲルベーであり、山の土掘りであった。罰として作業終了後、所内の清掃等やり、この生活がいつまで続くかと考え、情けなくなつ

た。

#### 九、ノーパー行き

昭和二十三年五月、ある日突然呼ばれ、自分の持ち物全部持ち集合せよとのこと。トラックに乗せられ、大きな川があり木材の集積場ノーパーに着いた。二、三日材木運搬等働いて、またトラックに乗せられチタ第十二分所に移動した。

#### 十、チタの生活

誰も知る人はいない反動分子の私は、棄て家であった。当時チタは大雨のため河川が崩壊し、その補修工事を二、三日やった。また、毎日作業は変わり、ある日は陸軍病院の薪割りに行ったとき、同郷の松井時二さんがジャガイモの皮むきをしていた。非常に懐かしかったが言葉も交わすこともなく別れた。

また、牛の屠殺場に行った。屠殺場の柵内には牛が、何日も草、飼料も与えずおくのでおとなしい。私は柵内の牛をロープに首をかけ屠殺場内の鉄格子の所まで引いて来る役であり、非常に楽であった。鉄格子の中は安全で、牛を引いて来ると、高所のロシア人

は、私に合図する上段にいて大きいハンマーの先にとがった鉄の先棒がついた物で牛の前頭部を一撃すると牛は倒れる。

他のロシア人が両足にチェーンをつけるとウインチで巻き上げ、上部は傾斜のレールにのせる。両足をつるし上げ牛は滑り動いた。第二工程で首が落とされ、次は皮はぎ、内蔵が摘出され、胴体がばらされ、前部の足がばらされ最後に倉庫に入る工程であった。

一週間ばかり屠殺場で働いた。ロシア人の殺し役が、私にハラシヨウラポータと褒めてソーセイジ親指大のものを三本くれた。他人に見られない所で食べる、便所が良いと教えてくれた。便所で食べたなら、おいしいこと、臭い汚いことなど忘れた。食べたその晩は下痢となり、一晩便所通いで苦勞した。

また、屠殺場に働いている女性たちは牛の内蔵の黄色い油、これが非常に食生活で大事な物であるという。油を衣類の中腰に巻いて隠して衛門の検査を受け、持ち帰ること平然としてやっている。また衛手もこれを認めていたようだ。

次の作業は、アパートの建設工事場でレンガ運び、毎日のように人は替わり案内作業であった。そのうち寒さも厳しくなり十月中旬ダモイの列車でナホトカに着いた。

#### 十一、ナホトカ

作業はないが毎日民主運動の総仕上げとして共産主義教育、また、赤旗の歌など大声で歌わされた。一週間くらいで引揚船が岸壁に近づいたときの喜びは今でも脳裏を離れない。

#### 十二、乗船

海岸に集められ私の名前が呼ばれたとき、喜び勇んで走り乗船した。船内に入り誰も知人がいない。二千人もの戦友が乗ったのにと不思議であった。昼食の米飯とワカメの味噌汁の味を腹の虫が喜んで非常に懐かしく美味しかった。

船が進むにつれ船内の一人の大男が立ち上がり大声で「シベリアで我々を苦しめたのはソ連ではない。ここにいるアクチーブの野郎どもだ。皆立ち上がれ」と叫んだ。皆立ち上がり大いに氣勢を上げた。この野郎

どもを日本に帰すことはできない、日本海にぶん投げろと言つて大騒動となつた。その時、船長が来て「私は日本政府を代表して皆さんをお迎えに参りました。船中の事件は私の責任であり問題を起ささないようお願いする」と言われ、皆納得した。

船は日本海を経て日本近海に近づくと小さい島々が点々と見えて懐かしく感じた。

### 十三、舞鶴上陸

舞鶴市民多数が日の丸の旗を振り、迎えてくれた。

復員局の建物に入り身体検査、被服の消毒、入浴、食事など、また復員の手続き等、二日間世話になつた。

最後の晩、赤飯、酒等で元気づいた。ところがまた船中で騒いだ連中が暴れ出し、アクチーブと喧嘩となり、アクチーブは逃げていなくなつた。復員局の職員の手注意で収まつた。

### 十四、米軍による調査

故郷に帰る前、米軍の調査があり、天幕が三カ所にある体格の良い日系二世の米兵がいた。そこで私は呼ばれて調査された。私のことは将校の調査であり日本

語で貴方は反動として大変ご苦労されましたねと言われた。チョコレートにタバコをくれた。それで終わりと云われ安心した。隣の天幕では米兵と大声で怒鳴り合う声が聞こえてきた。おまえの家族は共産党など大反対だぞとアクチーブに話しているのが、間近に聞けた。

### 十五、帰郷列車

帰郷のため舞鶴駅より上野行き列車に乗るも、帰郷列車であるが誰も知人がいない。また不思議に思つた。

### 十六、上野駅着

上野駅に着くと、同列車の戦友たちは、赤旗を掲げ、赤旗の歌を声高らかに歌い、代々木の共産党本部に入党届けに行くと大した氣勢をあげ、皆行った。私は反動分子だから一人逃げて行かない。上野駅構内外を見て幼き浮浪児の多いことに驚いた。駅外の石垣にトタンを掛け生活している様子、着物もよれよれで五、六人のグループで生活していたようだ。中に年長のボスみたいな者がいた。また、地下道に行くと酒で

酔っ払った者がごろごろと多く寝ている。一人歩きは  
気持ち悪く、恐ろしい感じがした。

敗戦のことが頭に浮かび、国民の惨めな生活をして  
いるのを情けなく思った。

#### 十七、上野駅出発

上野駅で東北本線下り青森行き列車に乗るも、復  
員者多数いたが誰も知人がいない。待望の盛岡駅に着  
くや親、姉、妹、妻とまた親戚知人など多数で迎えて  
くれ感激した。帰宅して驚いた。家は昭和十九年七月  
の水害で流されて私の出征前と変わっていた。

#### 十八、盛岡市役所に復員の挨拶

私は昭和十八年十月、市の職員で応召になり、復員  
したので十二月一日に市に復員の挨拶のため出所し  
た。市長室前で市長、助役、その他の職員多数が迎え  
てくれた。助役は、「佐々木君は満州、シベリアで五  
年間苦勞して、よく生きて帰った。大変ご苦勞さんで  
あった。おめでとう」と言われた。私は「満州、シベ  
リアで五年間苦勞しましたが、おかげさまで元気に帰  
りました。留守中家族は大変お世話になりました。あ

りがとうございます」と御礼申し上げた。

助役から、最近シベリア帰りは共産党を支持するも  
の多いそうだが、君はどう考えるかと言われ、私は反  
動分子としてつるし上げられ、営倉に入れられ、チタ  
に送られ種々の作業をやり、どこへ行っても知らぬ人  
ばかりで気楽な六カ月を過ごしたと申し上げると、君  
の考えは立派だと褒めてくれた。助役は、日本は戦争  
に敗れても神様仏様の国だとそう簡単に赤にはならな  
いよと言われた。

十一月三十日付け、会計課勤務の辞令をもらった。

佐々木君ゆっくり休んで体調が良くなったら出勤せよ  
と言われ、十二月十日に初出勤した。

#### 十九、マッカーサー司令部出頭

昭和二十四年四月、マッカーサー司令部の出頭命令  
通知があり、助役に見せたら、佐々木君お前がアメリ  
カに悪いことしたことないかと聞かれた。私はソ連軍  
とは戦争しましたが、アメリカとは関係ありませんと  
申し上げた。助役は、今まで出頭した者は米を持って  
行ったと言われ、食糧事情最悪の時代でもあり大事を

とり米二升を持って行った。何かの役に立つ、助役の親心であった。東京復員局に行き一泊し、五、六人の仲間がいた。翌朝九時米軍のバスに乗せられマッカーサー司令部に出頭した。大きな部屋にシベリアの地図がテーブルの上に広げられ、私のいたハタ部落の近郷の軍事施設、戦車隊、野砲隊、飛行場の有無を地図を見ながら聞かれて終わり、昼食をごちそうになった。また、バスで復員局に帰り、持参した米を復員局の職員に半額で売り大変喜ばれた。また多額の日当をもらい帰省し助役に報告した。大変ご苦勞様、行った甲斐あったと言われた。

## 二十、私の放浪記

反動のお蔭(一)で昭和二十三年五月より十一月までチタで作業、またソ連極東軍の司令部のある軍都チタ市内の見物もできた。(二)舞鶴の米軍調査良好(三)上野の共産党本部一人逃げて行かない(四)復員後市対応非常に良好(五)マッカーサー司令部出頭などで私のシベリアの人生は反動が好運を与えてくれたと生涯忘れ得ない貴重な経験であった。

## 二十一、感謝

最後にハタ部落の寮長、作業隊長時代に日本側所長藤川巖氏に多大なるご指導と激励をいただき生還したことを深く感謝申し上げます。また当時私の作業隊員の藤沢甚八氏、千葉信一氏、佐藤安三氏、昆求氏、藤原岩人氏、岡野与一郎氏の戦友各位のご協力のお蔭で生きて帰れたことに厚く御礼申し上げます。

## 【執筆者の紹介】

現住所 岩手県盛岡市加賀野

生年月日 大正七年一月一日

学歴 高小卒

## 職歴

昭和十六年十二月一日 盛岡市役所振興課

盛岡市役所会計課 庶務課支払係長

盛岡市立高等学校事務長

盛岡市立原敬記念館館長

盛岡市立愛宕山老人福祉センター初代所長(新設)

昭和四十五年 岩手国体皇太子両殿下ご視察

盛岡市立安倍館保育園長

盛岡市立桜ヶ丘保育園長（新設）

軍歴

昭和十四年五月一日 現役兵として、弘前歩兵三十一

連隊留守隊に入隊

昭和十四年八月一日 千葉陸軍歩兵学校教導連隊に派

遣

昭和十六年八月 関特演のため原隊復帰（北部十六部

隊）改編

昭和十六年十一月三十日 満期除隊陸軍兵長（下士官

適任証受ける）

昭和十八年十月十八日 応召

弘前北部十六部隊に入隊渡満チチハルにて独立守備隊

昭和十九年七月一日 特別補充下士官用員として旅順

四一五部隊（下士官教育隊）に派遣され八月三十一日

教育終了原隊復帰

昭和十九年九月一日 任陸軍伍長

部隊改編満州第七師団歩兵一七七連隊第一大隊本部

付きとなる。

昭和二十年八月九日 日ソ開戦となる

昭和二十年九月一日 終戦後五福瑯において、猪俣大

隊長より陸軍軍曹の任命の令伝達され軍曹となる。

抑留

昭和二十年十月 シルロア

昭和二十三年五月 チタ

昭和二十三年十一月二十日 栄豊丸 復員

（岩手県 田辺 壮久）

## シベリア抑留

岩手県 本宮 龍平

ラーゲル時代

タシケントのカマボコ兵舎

私が牡丹江ポダシコウに近い掖河エキガの野戦病院を退院したばかり

なので、中央アジアの暖かい地方に送られた。戦地で

別れた友達達は皆シベリアを経験している。

国境の町、綏芬河スイフンガを出てから二十四日目、シベリア